山と博物館

第30巻 第4号　1985年4月25日　大町山岳博物館

アルプスマーモットがやってくる

去る2月18日、オーストリアのインスブルック市アルプス動物園内にあるワイヤーブルック宮殿で、大町市とインスブルック市、山岳博物館とアルプス動物園との間に友好提携の調印がなされました。

この友好提携はオーストリアのアルプス動物園が、日本の特別天然記念物であるニホンカモシカ一番（ひとつがい）を贈ってほしいとの要請に端を発しています。

59年11月5日、山岳博物館で出生したオスカモシカ「大（だい）」（8才）とメスの「博美（ひろみ）」（4才）は一週間の検疫を経て日本を出発しました。しかし、残念なことに「博美」の方は、途中の中継地であるフランクフルトで死亡してしまいました。死亡原因は検疫期間中の騒音によるストレスや中継地での高温による消化器官の疾患などと推測されました。オスの「大」の方は無事到着し収容されました。

「博美」に替わるメスカモシカをと私達は検討の結果、「博美」の妹にあたるメス（2才）を贈ることにし、60年2月15日、日本を出発し、翌日の16日に無事送り届けることができました。アルプス動物園はヨーロッパアルプスに生息する動物のみを飼育しているため、飼育場は偶蹄類の飼育実績のあるウィーン市のシェンブルン宮殿動物園になりました。博美の妹は友好提携調印に参加した大町市側とシェンブルン宮殿動物園側と協議の結果、「博子」と命名されました。

このカモシカの返礼として4月27日、アルプス動物園よりアルプス・マーモット二番（ふたつがい）がインスブルック市代表、アルプス動物園長等と山岳博物館にやってきます。

アルプス・マーモットが日本に来るのは今回が初めてであり、山岳博物館で飼育しているカモシカ、ライチョウと共に可愛がってもらい、また、オーストリアと日本、インスブルック市と大町市の友好をさらに一層強めていきたいものと思っています。

千葉彬司（山博　学芸員）

福岡孝行先生を偲んで

丸山　彰

大町山岳博物館の顧問をしておられた法政大学福岡孝行教授が急逝して四年が過ぎた。

今は白馬山麓といわず全国のスキー場に大勢のスキーヤーが訪づれ、寒い冬を乗り越えてスキーの歓びを謳っており、その数は一千万人といわれている。太平洋戦争前には想像もつかなかっためざましい隆盛である。この隆盛を築きあげた人に福岡先生がある。先生の貢績はあまりに大きく、年と共に偉さがわかり頭のさがる思いである。

・終戦の年の冬、初めて先生にお会いしてから三十六年にわたり親しくご交誼を戴き、その中でいろいろなことを教わった。その教えは私の中核をなすものとなり、今も私の中に生きている。福岡先生は、私の人生で最も敬慕する大切な人であった。

気品があって礼儀正しい温容な人柄はいつも穏やかで、にこやかに誰とでも接し、ひとの話もよく聞いてくれた。深い学識から生まれる判断は極めて適格でありながら「……ではないですかねえ」と結論を押しつけることはなく考えさせてくれた。然し結果は言われるように展開していった。磨きぬかれた教養が生む識見というものだろうか。

この優れた先生が六十八歳で生涯を閉じられてしまった。寿命の延びたという今日、あまりに早い生涯であった。残念でならない。三十冊に余る著書、翻訳書を書き、雑誌等に与せた論文等は沢山の数であるが詳述する紙数を持たないので次に譲り、おつきあいを通じて見た先生を、お聞きしたことなどを交えて書いてみたい。

大正二年十月九日、高知県出身の東京外国語専門学校（現東京外語大学）福岡孝熊教授の長男として東京で生まれた。祖父孝悌氏は土佐藩士で、二条城に於いて将軍徳川慶喜に大政奉還を勧告し、明治維新には五ケ條の御誓文を起草した功労者で桂内閣の文部卿（文部大臣）司法卿を歴任した高官である。

昭和二年、小学校を卒業し学習院中等科へ入学した冬、当時としては高価なアッシュのスキーを買ってもらい、仲の良い従弟と妙高高原池の平で滑ったのがスキーの初まりであった。翌三年には新潟県関、燕温泉で行われた学習院山岳部スキー合宿に参加し、毎朝八時には宿を出発、夕方まで出放しで練習に励んだ。昼食は梅干の入った大きな握飯二つを雪の上でぷるぷる震えながらろくに噛みもせずに呑み下したという。施設の整った現在では想像できない情景である。

当時のスキー書には、上達の秘訣は「転倒二千回」と「直滑降十年」と記されていた。下にいって必ず転ぶことがわかっていても性懲りもなく滑降をくり返し、何とか停止できるようになることが願いであった。

また、スキーの他に中等科（五年制）と高等科（三年制）時代、陸上競技を志し、中距離ランナーとして活躍した。インターミドル（現全国高校大会）では八百米、千五百米に優勝を飾り記録保持者となり、インターハイ（現日本学生選手権大会）でも両種目に優勝を飾った。現在マラソンの瀬古選手の監督で知られる中村清氏（早稲田大学出身）はライバルで、千五百米の日本記録は二人のいづれかによって替えられるだろうと期待されたが高等科時代の末年、激しい練習で胸を痛め走ることを断念し期待の記録は生めなかった。

読書する福岡孝行先生
筆者宅にて（昭和34年7月8日）

静養しながら過ごした関温泉で宿の主人・笹川速雄氏を知り、氏の人柄とスキーの技術に惹かれスキーに傾倒していった。このころ『アールベルク・スキー術』という部厚いスキー技術書が出て、これを読んでは暗中模索をしていたが、昭和五年、この技術を作ったご本人・天才的なスキーヤー・雪の王者ハンネス・シュナイダーが来日した。東京青山の青年会館で講演と映画の会が開かれ、幻燈によって話が進められたが驚いたことには長いスキーに鋭いスチールエッヂが着いていた。転んだら怪我をしないだろうかと心配したが雪の王者はシーズン中に二、三度しか転ばないと聞いて「転倒二千回」を信じていたものには大きな驚きであった。またファンク博士の映画『スキーの驚異』に魅了され、益益スキーに惹ひつけられた。学校の試験が終ると早速弟の孝利さん（現武田）と関温泉へ出かけ数日滞在して技術の実験研究の結果、いままでできなかった深雪の中でのシュテムボーゲンができるようになった。その喜びは大きなものであった。

昭和十二年、東京帝国大学文学部へ入学した年の冬、自ら企画、監督してわが国最初のスキー映画『スキーの寵児』を東亜商事会社により制作した。作曲は新進作家高木東六氏撮影は自らがした。演技は高橋健治、藤巻文司、京極高光、島村勝彦、次井晟、小竹実、沈田忱、肥田正次郎の各氏の他に二十名程の一流のスキーヤーがあたった。この映画は大町スキークラブの骨折りで大町劇場で公開され私も観ることができた。

〝晴れ渡りたる青空　輝き満てり雪原（ゆきはら）……〟と、きれいなメロディの主題歌をバックに八方、栂池、立山の白銀の山々が美しく、大斜面に描くシュプールは見事であった。それにしても学生の若さでこの大作を完成させたとは驚きの他はない。この後、スチールを基に『シュプール』を刊行した。その中に〝スキーこそわが生命（いのち）〟と書いているが、若さ溢れる情熱が伺われる。

同じ年、レルヒ少佐から直接スキーの指導を受け普及に務めた陸軍高田師団の山口少将の息女華子さんと結婚し、やがて二男二女に恵まれる。戦争が激しくなった二十年、一家は一緒に山を歩いて親しい北城村細野の名ガイド大谷定雄さんを頼って疎開してきた。間もなく、終戦を迎えた年の冬、私は先生に会う幸運に恵まれた。北城小学校から私の勤める長野県大町中学校（旧制）へスキーの上手な二少年が入学した。この少年は丸山欽市、中村孝光の二君で、二人は創期の国体に本県を代表して活躍した当地方草分けの名選手である。二人に聞くと、英語とスキーを疎開している福岡という先生に教わっているということだった。私には孝行先生であることがすぐに解った。スキーの話を聞きたかったし、お世話になる生徒のお礼も申しあげたく疎開先をお訪ねした。一家は古い茅葺きの農家を借りて、家主の高齢な老母と同居という不自

福岡ご一家・母堂と共に。
（右端はお手伝いさん）
疎開を引揚げ法政大学に
就任した昭和23年ころ
藤沢市辻堂の自宅の庭で

由な生活をされていたが温いもてなしを頂戴した。村人以外に交友も少ないことから思いがけぬ歓迎を受け、その後、おつきあいをするようになった。お訪ねすると話がはずみ夜を明かしたこともあった。古い家には隙間風が吹きぬけ、雨洩りの水が土間に氷の小山を作るほど寒かったがスキーを駆って鳴山で折ってきたという小枝を囲炉裏で焚きながら、スキーのこと、教育のこと、八方の将来のことなど話は尽きなかった。大町の拙宅にも見えられて書籍の多くを疎開先には持ってこれなかったからと、私の本を食入るように読み耽って泊られることもしばしばあった。お酒も一緒によく飲んだ。お酒は強くきちんと座って崩れることのない上品なお酒だった。

細野では晴耕雨読の生活で執筆をしながら田を借りて米を作った。教わりながら苗代作りから稲刈りまでをやってのけた。冬籠りの漬物のために、借りた馬を一人で引き遠く南小谷村川内の大谷夫人の実家まで野沢菜をもらいに行ったこともあった。品のい、チロルハットをかぶって菜を積んだ馬を引く姿はなかなかのものであった。

福岡夫妻は細野の人達に同化しよい指導者であった。暗い戦争から解放された青年たちは、先生の人柄に惹かれ訪ねては豊かな知識を吸収した。新しいスキー技術も教わった。東京音楽学校（現芸大）出身の奥さんに歌の指導もうけた。二十一年十月、大町中学校に相模三蔵氏から寄贈されたピアノ披露音楽会を開いたが演奏者に奥さんをお願いした。着物を着た美しい奥さんの弾くショパンのワルツは、戦後初めて聴くクラシックの音楽で印象の深いものであった。

言語学を専攻した先生は言葉を大切にした。隣組の葬儀の手伝いで不足の品を近所に借りにいく時の口上が「おいとおしくも□□を貸してください」であり、厚い礼儀と物を大切にする心の籠った言葉だと感心されていた。また方言を好んで村人にはよく使った。私の貰った電文がヤウチデイク（家中で行く）であったり、私との挨拶にユーモアを交えてかさまめってかい（嬶さ丈夫かい）と家内を案じての言葉であったりした。

誰からも親しみ愛される人柄は、細野の人達の信頼を受けながら八方尾根開発を進めていった。幾多の難問題を解決して二十二年三月、念願の「第一回リーゼンスラローム大会」の開催にこぎつけた。大会の前夜は遅くまで準備に忙殺され、僅かの睡眠時間しかとらなかったにも拘わらず早朝五時起床、スキーを担いで三時間、黒菱の出発点まで登り、時間を合わせた最も大切なストップウオッチを懐に前走者を務めた。（当時トランシーバーなどはなく、出発と決勝が事前に合わせた時計によって行われた。）鳴山の急斜面を真剣な凜とした顔で、見事なフォームで滑り下った姿を鮮かに思い出す。自分が提唱し、拓いたコースの責任者として前走した責任の深さとスキー技術の自信に頭がさがる。大会は今年で三十九回を数え、参加希望者は千名を越す盛況で一流選手が参加する権威あるわが国最大の地方大会になった。大学時代の友人・五島昇氏を招き八方尾根にケーブルを敷きめざましい発展をもたらせた貢績もある。

中信高等学校体育連盟講習会指導の折
筆者（右）と、大町スキー場で。（昭和30年ころ）

大町で知り合った山岳博物館設立の功労者内山慎三氏は館長に最も相応しい人と、関係者と謀り就任を懇望したが、既に法政大学への席が決まった後で成らなかった。

堪能なドイツ語により国際交流に尽くしたことも立派な業績である。オーストリアからルディ・マット。ステファン・クルッケンハウザー教授らの招聘に力を尽くし、国内各スキー場を回り、通訳と実技に活躍しスキーの普及に努力した貢績は大きなものである。

ルディ・マット氏の国内最後の講習会が細野スキー場で開かれたのは、三十三年二月六日のことであった。百人を越す受講生が初めて本場のスキーを見ようと待つ鳴山の上部にリフトで上がったマット氏と先生が現れた。かたずを呑み見守る中を二人の滑走が始まった。紺碧の空を区切る鳴山の急な大斜面を二人の呼吸がぴたりと合い見事な滑走であった。理論と実際ができる先生の真価を見た。

五十一年三月十日、この鳴山の麓に先生の業績を讃え記念した碑が建てられた。碑には自作の詞が刻まれている。

〝しろうまの美しき地に
むら人のこころひとつに
若人たちがちから合わせて
天かけるしろうまのごと
スキー駆るコースを拓く
アルプスのふもと
南は大町北は小谷
相よらいて
リーゼンスラロームコースを拓く〟

「白馬山麓は、大町から小谷まで仲良くよらって発展を考えなければいけませんね」とよく言われたが、その言葉が刻まれている。

先生のスキーには、誰にもない深い思想があった。二十三年に刊行した『自然なスキー』につぎのような言葉がある。

〝自然、山は私にとって古典以上の古典であり、本書はかゝる自然との調和格合への探求の足跡であり、その意志の表出に他ならない。自然との調和格合によって人間は最も能率的にその力を発揮し得るであろう〟と。

私の務めた中信高等学校体育連盟の生徒対象の講習会も先生の協力をいただき、リーゼン大会の翌年発足し、今年三十八回を数え参加者が二千五百名を越えた。発足して十数年は、東京からおいでを願い指導を受けたが、先生を尊敬する教諭たちが続ける遺産である。

四十八年五月、東京丸の内の日本工業倶楽部に招かれた次男孝誼さんの結婚披露宴の折常陸宮ご夫妻がご臨席になられた。宮様は三時間にわたる長い宴に終止福岡家の方方と談笑されておられたが、皇族をお招きできる福岡家が並の家でないことを改めて知った。

五十三年にはスキーを通じて日墺友好及び文化交流に貢献したことで、オーストリア政府から「共和国大栄誉章」の勲章受章の栄誉に輝いた。

昭和五十六年二月十八日早朝五時、大町の私の家の電話が鳴った。藤沢辻堂のお宅の長男孝純さんの奥さんから、細野に滞在中の父が危篤だと告げられた。無中で細野へ向かったが一足遅く還らぬ人であった。苦しさを訴えて二時間、心筋梗塞による急逝であった。滂沱として流れる涙はどうしようもなかった。悲しいお別れだった。

この朝、空は透き通るように碧く澄んで八方尾根の雪は白く美しく輝いていた。先生の霊は最も愛した八方の雪に召されていったのだ。

〝晴れ渡りたる青空　輝き満てり雪原…〟

今ごろ、先生は何処を滑っておられるのだろうか。

〝今は在らず山は遥か　雪山の聖らなれば
かくも切なく眼に浮かぶ〟

『スキーの鶴見』の歌詞より

（大町山岳博物館嘱託員）

欧米の動物園を巡って

内川公人

円安の時期に外国に出る旅行者ほどみじめなものはない。食べ物の倹約を強いられることさえあるからである。筆者も、そのような折に数ケ月欧米をまわり、休日を消化するための駆け込み寺がわりに動物園を選んで、終日動物たちを眺めて過したことがある。そこで気付いたことを、綴ってみたいと思う。

この動物園巡りは、まずシカゴのブルックフィールド園にはじまった。理事の一人である昆虫学の老大家のご招待を受けてのことであった。広々とした構内に入ると、二十年を園で過して国内最年長になったセイウチの誕生日を祝い、観覧者にケーキを振舞っているところだった。すっかり貫禄のついたこのマスコットを後にして案内されたのは、小さな木造の夜行動物館だった。目が慣れてくると齧歯類やコウモリ類をはじめとする小型動物が盛んに活動している様が手にとるように分った。観覧の子供たちの興奮を伝え合う上ずった声を耳にして、こゝが人気を集めている展示館であることを実感した。筆者は、はじめてナマケモノを見ることになったが、待てども身動き一つしないこの名の動物に根負けして、苦笑しながら屋舎を離れることになった。小さいながら、動物の種類が多く、とても充実した館だった。次ぎに、とてつもなく大きなアフリカ館に案内された。こゝには密林を模した植林があり、滝が音を立てゝ落ち丸木橋も懸けられていて、鳥たちが飛んでいた。よくみると川沿いに大きなゴリラが退屈そうにうずくまっており、ピグミー・ヒポス（かば）もかすんでみえた。動物を点景にして、ジャングルの雰囲気を出そうとするアイディアはよく分るし、相当の経費を注ぎ込んでいるようだが、思惑く通りにはいっていない。以上の二つの対照的な展示館をみてから、動物園では珍らしい動物たちをみる楽しみのほかに、動物展示法の妙味を味わう喜びのあることに気付いた。

ロンドンやニューヨークの動物園は、ともに世界最大級の規模を誇っている。不思議なことに、ロンドン動物園で珍獣や珍鳥にお目にかかっても、あまりにも重苦しい檻に入れられているためか、さほど興が湧かなかった。創立の歴史や飼育記録を示されると、たゞ脱帽するばかりであり、動物園関係者や動物学者などのその道の専門家を喜ばせる動物園であるにちがいないが、なんとも素人受けしない園である。もちろん随所に、指導的な動物園の面目が施されており、夜行動物館に入るとどこでみたものよりも明るく、人気者のアフリカキツネを写真に収めることができるほどであった。馴化のための研究が最も進んでいる証拠であろう。ロンドン動物園は、動物たちの休養と繁殖のための姉妹園ウイップスネイドパークと連係して機能している。後者は動物たちのための動物園であって、この点でニューヨークのブロンクス園と共通する部分をもつ。このような大きな園は、絶滅に瀕した動物たちが繁殖しているかけがいのない場所でもあるが、存分なスペースを与えられた動物は人から相当の距離を保って行動していることが多い。序め観察用具などを準備して出向かないと、楽しみの少ない動物園になってしまうだろう。

バーゼルの動物園を訪ねたのは、ブロンクス園をみて間もない日だった。美しい動物を写真のように間近かにみることができ、しかも檻や囲いに代えて目立たない堀を巡らせているために開放感があって、動物たちに親しみを覚えた。はじめて出会った美しくて楽しい動物園であり、いつまでも良い印象が残っている。その後にみたフランクフルトやハンブルグの動物園からオランダの片田舎の小園に至るヨーロッパ大陸の動物園では、動物の展示法がバーゼル園のそれと同様であって、とても親しみやすいものであった。動物園が動物と観衆とが接する場であることを意識して、両者の距離を縮める努力が払われていることに感心した。こゝに、フランクフルトで園外の路上で写したヒグマの写真を示すが、このような動物をみると、早く園内に駆け込みたくなるものである。

バーゼル園にて

動物園は、教育、動物の保護と増殖、さらにはレクリエーションの場として、大きな役割りを果してきた。自然を加速的に失いつゝある今、その役割りは一段と大きなものとなっている。種々なタイプの動物園のあることを示したが、いずれもよって立つ地域の文化のシンボルとして存続しているのである。訪園者は、展示動物の一時の晴姿をみているに過ぎず、それを演出している部分をみることは難しい。この目にみえない大きな部分を、地域の社会が支えないと、園は成り立たないであろうし、支え方如何で園の性格が定まるであろう。訪問先で、Friend in need という看板を一度ならず目にしたが、まさかのときの友を求めながら経済的な窮状を訴えていたのである。動物園の歴史の浅いわが国で、各種動物園の立つ基盤は堅牢なものになっているだろうか。

（信大医学部寄生虫学）

ヒグマと遭遇!?

山と博物館　第30巻　第4号
一九八五年四月二十五日発行
発行所　長野県大町市　TEL㉒〇二一一
大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町
大糸タイムス印刷部
定価　年額一二〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一三二九三）